

守隨憲治著作集

第一卷

歌舞伎劇曲研究
近世戲曲研究

守隨憲治著作集

第一卷

守随憲治著作集 ●第1卷

昭和51年12月20日 初版発行©

¥ 7,500

著 者 守随憲治

発行者 池田猛雄

発行所 有限会社 笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

☎ 03-295-1331(代) 振替東京 1-56002

検 印
省 略

3091-957027-0924

科学図書印刷・手塚製本所

巻頭偶感

いつの間にやら、自分の著作集なるものが出されることになって、今更ながら、他人事のような気がする。それにつけてもこの刊行事務に当る諸君の御苦勞を思うと、恐縮千万である。殊に、いつも耳にしているが、僕の文字がはなだ読みづらいそうで、どうもイヤハヤというばかりだ。

大学を出てからいつの間にか、演劇研究の専門家のようにされてしまったが、自分ではそんな考え方は毛頭持っていない。ただあれこれと書く人たちの中での先輩格にされてるのが、実状という所だろう。もっとも、子供時分から歌舞伎を見て行かれてたことは事実だ。一体に明治から大正へかけての時分の、東京の下町の暮らし方が、そんなものだった。大学を出てから、教師になって、しやつめらしい顔をして教壇から講義をするなどは、身内の誰もが想像もしなかつたろう。恐らく、なくなつた親仁もそんな風になつていくとは夢にも思わなかつたに違いない。親仁という人は、ただ子供には勉強が大事だということだけがあつたようだ。その勉強というのは、昔風な読み書き一点張りで、後藤点の美濃判の『小学』が每晚机の上に拡げられる本だった。小学校に入る前の子供の頭に、解釈も何も判るはずがない。文字は丸暗記でせいぜい返り点の動き方を覚えたくらいが関の山だった。親仁自身も漢学者ではないのだし、正當な字句の解釈等を示すこともなかつたのだから、随分乱暴なことだつたと思う。しかしこれが昔の普通の人たちの描いた勉強という場面だつたのだらう。

習字の方は、親仁が好きで折本を集めていたので、その中から楷書の書きよさそうなものを選んで、これを習えという調子であてがわれた。今でも覚えてるのは長三洲とか細井広沢といったのがある中で、董其昌が癖がなくていいなという感じがあった。親仁自身は大師様が好きで、妙に丸まった字を書く癖があった。半分は弘法大師への信仰が手伝ったものだった。そんな具合で、机の前に坐ることは、一種の楽しみも宿って、そう辛いという感じはなかった。

そんな反面、母親違いの姉に踊と三味線の達者なのがいて、半玄人みたいに始終楽屋へ出入りしていた関係で、芝居へ行く時は、いつも奈落を通ったりしていたから、舞台で綺麗な女方が部屋に入るときちんとした男で、煙管を持ってる形など、始めの頃、不思議な世界だと驚いたものだが、そんな事から歌舞伎に愛着めいたものを感じるようになったらしい。

大学で卒論を決めるについて、当時の主任の藤村先生は、歌舞伎をやった人が居ないから、一つおやんなさい、と勧められた。一体に近世は敬遠されてた時代で、せいぜい俳諧程度だったから、こちらも題目が教授会を通してしかといたものだ。先生は大丈夫ですよといわれた。それに国語の主任で文学部長だった上田万年先生は、根が名古屋人だし、歌舞伎は好きだったから、やれやれとけしかけられて、歌舞伎に決めたのだった。実は名古屋の大惣本の台帳と丸本が何百部というもののそのままに、国語の研究室にはうずまっている。前からの噂で、あれをひとつ見たいもんだというのが、大学に入る前からの大願望だった。

さて大学を出たその年の暮に、日大の講師にされたのが皮切りで、教師稼業が身につくようになった。その頃まで、学校の教師なんてものは能無しものやる事だというのが、下町辺の人の口調だった。

翌年四月東京高校と東京女子大学と関東女学校に關係した。東高からやがて母校の一高へ転じたりしたが、関東というのが後に大学となつて、今その学長をやる事になった。運命というものは皮肉なものだなど思つたりしてゐる。今回の著作集の第一巻の巻頭の論文は、勧められて昭和十六年に整理して、学位請求論文として東大に出したものである。十一年頃からの東大その他の講義を集めた論文集なのだが、これもあの時分、東大側に学位を持つてゐる者が一人ではまずいから早く出すようにと、主任の久松さんから口説かれて、しぶしぶ出したものの、今日から見ると、子供じみてゐると思つてゐる。

昭和五十一年十月

守随憲治

刊行のことば

近世国文学界の泰斗守随憲治博士の業績中、偉大な足跡がしるされているのは、歌舞伎と操り浄瑠璃という、江戸時代を代表する二大演劇の分野である。

昭和六年の『近世戯曲史論』をはじめ、『歌舞伎劇戯曲構造の研究』『歌舞伎通鑑』『歌舞伎序説』など、文献学的実証性を基礎としながら、総合舞台芸能としての特性にも充分な考慮を払われ、趣味に流れがちな演劇研究の科学性を樹立された。就中、昭和六年刊の『歌舞伎図説』など、画証資料の学術的考察の、先駆的、記念碑的な業績であった。

ここに、博士の著述中の代表作を選び、本集五冊、別集一冊の全六冊の『守随憲治著作集』を刊行することは、国文学研究の現状にあつて、大きな今日的意義があると信ずるものである。

昭和五十一年秋

守随憲治著作集刊行会

守隨憲治著作集 第一卷 目次

卷頭偶感

刊行のことば

歌舞伎劇戲曲構造の研究……………一

近世戲曲研究……………二五

編集後記

歌舞伎劇曲構造の研究

緒　　言

歌舞伎がカブキという語の成立によって、宿命づけられていることは、今日何人も否定できないと思うが、試みにこの語の発生時代の用法を調査してみると、はなはだ興味がある。

おしほといふかぶき来る。勸進はせず（慶長日記）

この「カブキ」は、例のお国の演技の模倣者が全国的に横行してからの「おしほ」と名乗る女のことであって、当時の語でいえば「かぶき女」と共通した意義である。演技者を意味し、役者俳優の義である。

これははや古臭き唄にて候程に、めづらしきかぶきをちと見申さう（歌舞伎草子）

都の春の花ざかり／＼かぶき踊にいでうよ

（同）

前例の「カブキ」は後例の「カブキ踊」と全く同義である。すなわち演技そのものを指す。この語の名詞形としての第一義と見るべきであろう。これには説明句がある。

男の装束し刀を横へ歌舞す。俗にかぶきと名づく（野槌）

という。つまりお国の示した異様な態の歌舞が「かぶき」なのである。これに関して又、

大鳥逸平と申すかぶき者ありて召捕はる（慶長年録）

という類の用語が見出される。「かぶき人」ともある。「カブキ者」とか「カブキ人」とか遣っているが、これは前例の義に通ずるものである。かようなかぶき者の性格が当年の新興民衆の性格に通ずるものであったので、そこにカ

ブキ踊の誕生も認められる訳である。このことは、又「カブキ」をカブキ踊の観衆の義に解せしめる。

かようにして、「カブキ」という語は、動詞のカブクから流用せられるようになったのであるが、この作用は、資料の調査から見ても、そう年代の古いものではないようである。（語源的に上代の用語まで遡る説はあるが、ここはそれとは別問題である。）すなわち名詞化する場合に、このような種々な内容を同時に派生したと解せられよう。用法の例は、やや年代を下すが、カブキ又はカブキ芝居、すなわちカブキの劇場の義に転用せられた場合は、今日にも及んでいる。劇場の義が年代の新しいことは、劇場の設立からみて、当然のことである。

さて以上のように同語の種々な意義を、ほとんど同年代に用いていたということは、カブキそのものの本質を解説していることでなければならぬ。今日、演劇の構成要素を説明する場合、俳優と観衆と劇場というように、一般に認められているようであるが、こういう意味が、歌舞伎劇には極めて密接な問題として考えられねばならぬようである。戯曲というものを取り出して考察する場合でも、それらの各構成要素を認めずしては、到底充分な判断を下すことは不可能である。日本の演劇あるいは東洋の演劇の、重要な特色がここに在ると思う。

歌舞伎劇の演技的系統としては、踊の他に舞の在ることを認めねばならぬが、その戯曲的性格はカブキ踊すなわちカブキが主体となつて、組織されていることを識らねばなるまい。しかる時、右のようにこの語の成立状況が示したように、その戯曲性は、演技と交渉し、俳優と交渉し、社会と交渉する等、きわめて複雑なものを示していて、戯曲文学というような単純な考察態度に満足することができぬのである。歌舞伎劇の戯曲史も戯曲論もこの立場を措いては充分に成立せぬであらう。

戯曲論の組織には、主題や題材の問題があり、脚色構造の問題があり、実際の上演に交渉する応用上の問題もあるが、主題や題材の方面に関しては、古来の調査によって、多少なりと整理せられていて、応用上の問題に関しては、

戯曲性の上からは直接性を欠く部分があるから、整理方法の上に他の方面とは別な態度を必要とする。脚色構造方面の研究は、いわば中枢的位置を占めるが、この演劇の性質上、非戯曲性との交渉を否認することの不可能なために、整理上の混雑が多く、従来誰も着手しておらなかった。本研究は右の問題に範囲を定めて、調査整理を実行したものである。

もっとも、本研究は全体として、昭和十一年度及び十二年度における東京帝国大学の講義として発表したものであり、一部は昭和十年度の東京女子大学の講義、昭和十三年度の慶応義塾の講義として発表した部分もある。資料として用いた文献は、年表方面については、年代記等を一切顧みず、直接に番附（江戸は紋番附を主とす）や評判記に限り、戯曲方面は、資料的価値の認められる翻刻の他は、直接に書卸の台帳に拠ることとした。様式の解釈や用語の問題に関して、研究書として、直接参考となったものは、中に引用しておいた外にはあまりなかった。一般論的な立場において、参考となったと思われるものは、島村民藏氏著『劇の創作と鑑賞』、『戯曲の本質』、藤井真澄氏著『戯曲の創作と構造』、新関良三博士著『演劇論集』、外山卯三郎氏著『舞台芸術論』、同氏編『演劇学研究』等である。

昭和十六年六月

守 随 憲 治 識 す

目次

緒言	三
第一章 特質論	一一
第一節 融合性	一一
第二節 照応性	一六
第三節 多様性	二六
第二章 取材論	四一
第一節 基調的態度	四一
第一世 界	四三
第二役 柄	四〇
第二節 作用形式	六一
第一 書卸の作用	六一

第二	重筆の作用	六
第三	融合の作用	七
第四	遊離の作用	七

第三章 構造理論……………八五

第一節	先行理論としての能楽の理論	八
-----	---------------	---

第二節	歌舞伎劇戯曲の構造	九
-----	-----------	---

第一	発生期の構造	九
----	--------	---

第二	発達期の構造	四
----	--------	---

第三	完成期の構造	一〇
----	--------	----

第四	衰退期の構造	一一
----	--------	----

第三節	歌舞伎劇の理論形式	一四
-----	-----------	----

第四節	内部的形式による觀察	一〇
-----	------------	----

第四章 幕の研究……………一二

第一節	幕の意義	一二
-----	------	----

第二節	一幕物	一七
-----	-----	----

第三節 多幕物	一四一
第四節 序段の幕	一五三
第五節 破段の幕	一六〇
第六節 急段の幕	一七三
第五章 場の研究	一七九
第一節 場の意義	一七九
第二節 開場の組織	一八七
第三節 閉場の組織	一九七
第四節 特殊場面の設置	二〇九
第六章 ト書の研究	二三一
第一節 意義と作用	二三一
第二節 発生と展開	二三〇
第七章 台詞の研究	二四〇
第一節 意義と作用	二四〇

第二節 台詞の種類	二七
第一 対	二七
第二 独	二八
第三 離	二九
第四 傍	三〇
第五 割	三一
第六 連	三二
第三節 発生と展開	三七
跋	三三